

# 英和辞典における助動詞 will の単純未来と推量の 用法に関する記述についての調査と考察

吉 川 勝 正

## 要 約

英和辞典における助動詞 will の単純未来と推量の用法に関する記述を調査してみると、話者の確信度に言及していないものが半数程度あり、訳語も「～だろう、～でしょう」という語が多用されて、will の持つ話者の高い確信度が十分に反映されていなかった。さらに、should と比較すると、will が should より話者の確信度が高いにも関わらず、多くの辞典では、should には「～のはず」との訳語を多用しているために、逆に should の方が話者の確信度が高いと思わせる記述になっていた。

今後の改訂などでは、will が should より高い話者の確信度を表すことを明記し、かつそれが明確に伝わるような訳語の工夫が求められることを提案した。

## 1. はじめに

この論考の目的は、英和辞典において、助動詞 will の（単純）未来や推量（推測や推定などとも言われる）の用法に関して、どのような説明ならびに英語の例文や日本語訳が与えられているかを調査・比較・検討し、望ましい説明や日本語訳を考えることである。

この論考の一つの大きなきっかけとなったのは、筆者が本学の授業で will の未来や推量の用法の含まれている英文の意味を学生に問うた際に、ほとんど例外なく「…だろう、…でしょう」との言葉しか出てこなかったことにある。使用頻度の高い重要な用法でありながら、学生にとって、未来や推量の will は「…だろう、…でしょう」としてのみ理解されているようであった。そこで、英和辞典や学習参考書や英文法書での will の未来や推量の用法についての説明を調べてみる必要があると判断したわけである。学習参考書と英文法書における will の扱いについては吉川（2013）を参照されたい。

授業での学生達の「…だろう、…でしょう」の一辺倒な訳語に疑問を感じていた頃に、ピーターセン（2011）の中で「…だろう、…でしょうでない will」（pp.88-93）との記述に出会ったこ

ターセン (2011) の中で「…だろう、…でしょうでない will」(pp.88-93) との記述に出会ったことも、will に関して英和辞典や学習参考書や英文法書を調べる必要があると判断したもう一つのきっかけとなっている。

ただし、本稿では英和辞典に焦点を絞り分析を行った。

## 2. 英和辞典における will の説明

### 2.1. 分析対象辞典

分析の対象とした辞典は以下のものである。

1. 田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2003) 『E ゲイト英和辞典』初版 ベネッセ
2. 小西友七・南出康世編 (2007) 『ジーニアス英和辞典』第4版 大修館書店
3. 花村金悟・野村恵造・林龍次郎編 (2008) 『オーレックス英和辞典』初版 旺文社
4. Leech Geoffrey・池上嘉彦他編 (2007) 『ロングマン英和辞典』初版  
ピアソンエジュケーション
5. 竹林滋・東信行他編 (2009) 『新英和中辞典』第7版 研究社
6. 山岸勝榮他編 (2008) 『アンカーコズミカ英和辞典』初版 学習研究社
7. 竹林滋・東信行・赤須薫編 (2013) 『ライトハウス英和辞典』第6版 研究社
8. 大塚高信・吉川美夫・河村重治郎編 (1998) 『カレッジクラウン英和辞典』第2版 三省堂
9. 竹林滋・小島義郎・東信行編 (2006) 『ルミナス英和辞典』第2版 研究社
10. 浅野尋・阿部一・牧野勤編 (2011) 『アドバンストフェイバリット英和辞典』初版 東京書籍
11. 浅野博・緒方孝文・牧野勤 (2010) 『アルファフェイバリット英和辞典』第2版 東京書籍
12. 木原研三監修 (2010) 『グランドセンチュリー英和辞典』第3版 三省堂
13. 井上永幸・赤野一郎編 (2013) 『ウィズダム英和辞典』第3版 三省堂
14. 瀬戸賢一・投野由紀夫編 (2012) 『プログレッシブ英和中辞典』第5版 小学館
15. 山岸勝榮他編 (2013) 『スーパーアンカー英和辞典』第4版 学習研究社
16. 八木克正他編 (2005) 『ユースプログレッシブ英和辞典』初版 小学館
17. 野村恵造他編 (2014) 『コアレックス英和辞典』第2版 旺文社

上記の辞典は以降すべて番号で示す。

## 2. 2. 記述内容

1 (pp.1911-1913) から順に見ていく。will の推量の用法として、未来の推量と現在の推量を挙げている。未来の推量の訳語には「…するでしょう」を与えている。例文としては It will rain tomorrow. (明日は雨でしょう) We'll be very busy tomorrow. (明日はとても忙しくなるでしょう) Work hard so (that) you will pass the test. (試験に受かるように一生懸命に頑張きなさい) Hurry up, or you'll be late. (急げ、さもないと遅れるぞ) I hope you'll like it. (気に入ってくれるといいのですが) "How much do I owe you?" "That'll be 50 dollars." (おいくらでしょうか) (50 ドルになります) 「これは現時点でのやりとりだが、That'll be …と推量の余地を含意する未来表現にすることによって丁寧さを出す効果が生まれる」 This bus will take you to the museum. (このバスに乗れば美術館に行けるでしょう) 「無生物主語構文で will が使われると、通例主語の部分に条件の意味が含まれる」 I'll be 18 next month. 「僕は来月で 18 歳になる、などは単純未来と呼ばれる。厳密に考えれば、無事に生き続けていれば、そうなるはずだという推量を含む。一方、Tomorrow is Sunday. (明日は日曜日だ) で will be を使えないのは、推量の余地のない確定的な事柄と捉えているため」次に現在の推量のところでは、「(今) …でしょう by now や already などの副詞または発話状況から、現時点の事柄に言及しているということに誤解の余地のない場合に用いる」との説明が先ずある。添えてある例文と日本語は次の通りである。Is she not at home? Then she will be in the library. (彼女が家にいないって？それなら図書館にいるでしょう) She will have arrived at Kobe by now. (彼女は今頃神戸に着いているでしょう) You'll have finished your homework already, I guess. (もう宿題は終えているんでしょうね) ただし、話者の確信の度合いに関して言及はない。

2 (pp.2193-2194) では 1 と異なり一人称主語、二人称主語、三人称主語に分け、その中で意思未来と単純未来にとさらに分けて、will の単純未来の用例を紹介している。一人称のところでは訳語として「…でしょう、…だろう」を挙げ、例文としては、I will be 20 next year. (来年 20 歳になります) Will we be in time for the train? (電車で間に合うでしょうか) I won't be seeing him again. (彼に二度と会うことはないでしょう) 二人称主語の単純未来のところでも同じく「…でしょう、…だろう」との訳語を与えている。添えてある例文は、You'll be disappointed if you hear her sing. (彼女が歌うのを聞いたらがっかりするでしょう) Will you be at home tomorrow? (明日家にいらっしゃいますか、文脈によっては明日家にいてくださいの意味にもなる)」三人称主語のところでも、訳語としては「…でしょう、…だろう」を添えてある。例文は It will snow tomorrow. (明日は雪になるでしょう) They'll be pleased to

see you. (君に会ったら、彼らはよろこぶでしょう) She won't pass the exam because she won't study for it. (彼女は受験勉強しようとしないので、試験には受からないだろう) Tom won't be cutting the grass. (トムは芝生を刈らないだろう) The paint will be dry in half an hour. (ペンキは半時間もすれば乾きますよ) That will be \$ 5.25 in all. (全部で5ドル25セントになります。that is …よりは丁寧、that would be …とするとさらに丁寧になる) 現在に関する可能性・推量のところでは訳語として「…だろう、…でしょう」を挙げ、話し手の確信度については might の項を参照せよ、とあり、might の項には could, might, may, can, should, ought to, would, will, must の順に話し手の確信度は強くなる、とある。添えてある例文は You'll be starving after your long walk. (長い間歩いたのもう腹ぺこでしょう) That will be John, I expect. (戸口に誰か来たので、あれはジョンでしょう) She won't be there. (彼女はそこにいないでしょう) (= I guess she is not there) 次に S will have done の形を挙げ、現在完了に関する推量と、現在からみた過去の推量の用法を紹介している。訳語はそれぞれ「(もう) …してしまっているだろう [でしょう]」と「…しただろう [だったでしょう]」を添えている。例文は That house will have been pulled down years ago — it was empty and falling to pieces when I last saw it in 1995. (あの家は何年も前に取り壊されているだろう。1995 年に見た時は誰も住んでなくて、崩れ落ちそうだったから) She will have posted the letter yesterday. (彼女は昨日その手紙を投函したのだろう。It is probable that she posted the letter yesterday. が普通) She won't have received my letter yet. (彼女はまだ私の手紙を受け取っていないでしょう) We'll have lived here five years in September. (9 月になると我々はここに 5 年住んでいたことになるでしょう)

3 (pp.2167-2168) ではどうであろうか。単純未来に対しては、「…でしょう、…だろう」、「…しているだろう」、「…するだろう」、「…してしまっているだろう」との訳語を与えている。加えて、語法の補足説明として「他人の未来の行動を will で表すと、自分のことでもないのに確信をもちすぎたという印象を与えることがある。友人がパーティーに来る予定だと知っている場合でも、He will come to the party. と言うと、(彼は絶対にパーティーに来る) と確約しているような印象を与えたり、(無理やりにでも連れて来る) と言ってるように解釈されかねない」とある。この説明を読めば、will が他人の未来の行動に関して使われる場合は、話者がかなり高い確信度を抱いていることが分かる。ならば、最初の訳語のところにも「きっと…だろう、…するに違いない、…するはずだ」の訳語も与えておいた方がより親切で理解されやすいのではないと思われる。例文としては、I'll be seventeen next month. (来月 17 歳にな

ります) We'll be able to get there by noon. (私たちは正午までにはそこに着けるでしょう) When will I know the result? (結果はいつわかるのでしょうか) I hope you'll like it. (気に入ってもらえるといいのですが) It won't be much of a rain. (大した振りにもならないでしょう) Will the train arrive on time? (列車は時間通り着くのでしょうか) I will be having lunch with her this time tomorrow. (明日の今ごろ彼女と昼食を取っているでしょう) What time will you be coming back? (お帰りは何時でしょうか) I will have finished the work by evening. (夕方までには仕事を終えているだろう) We will have lived here for ten years next month. (来月でここに住んで10年になる) この最後の例文と同種の例文は前の2では推量のところで挙げてあるだけでなく、訳語が断定の「である」ではなく「でしょう」となっている。辞典によって考え方が異なるのか、それともどちらかの単なるミスかは分からない。この辞典では PLANET 69 のところで、予測の意味で will と be going to をどう使い分けるかを紹介している。この囲みのコラムで「あの黒い雲を見てごらんなさい」に続く文として、It's going to rain. と It'll rain. の二つを挙げて、後者の方が強い確信を表すとの母語話者の意見を紹介している。

4 (p.1980) では上記 1, 2, 3 の辞書とは異なり「単純未来」の言葉は使われていない。代わりに「未来のことを述べるのに用いて、…することになっている、などを意味する」とある。例文としては A meeting will be held next Tuesday. (会議は次の火曜日に開かれます) What time will she arrive? (彼女は何時に着きますか) I hope they won't be late. (彼らが遅れなければいいのだが) She'll be disappointed if she loses this game. (この試合を落としたら彼女は気落ちするだろう) It will be interesting to see what happens. (どんなことになるか見もの) Maybe by then you will have changed your mind. (ひょっとしたらそのときまでに気がかわってるんじゃないかな) もうひとつの推測の用法として「…だろう、…に違いない」との訳語を添えている。例文としては、That'll be the mail man. Could you answer the door? (郵便配達の人だろう。ドアに出てくれる?) They will have arrived by now. (今ごろはもう着いているだろう) この辞典には確信度についての言及はないが、訳語で「…することになっている」や「…に違いない」との言葉を与えていることで、ある事柄が将来起きる可能性が高いことや、それについての話者の確信の度合いが高いことを示している。この辞典では他の多くの辞典に見られるような単純未来とか意思未来などの用語は使われていない。利用者にとっての分かりやすさや使いやすさを優先しているように思われる。

5 (p.2065) ではどうであろうか。この辞典は現在が7版で、古くからの辞典である。先ず単純未来のところで「…だろう、…でしょう」の訳語を添えている。例文は I hope (that) the weather will be fine and that you will have a good time. (いい天気で楽しく過ごされますように) It'll be fine tomorrow. (明日は晴れるだろう) I'll be seventeen on my next birthday. (今度の誕生日で17歳になります) The party will be postponed if it rains tomorrow. (明日雨ならパーティは延期されるだろう) I'll have finished this work by five o'clock. (5時までにはこの仕事を終えているでしょう) Will he be able to hear us at such a distance? (こんなに離れていて彼は聞こえるでしょうか) 推量の項目では「…だろう」との訳語が添えてある。例文は That will be George at the door. (ドアのところにいるのはジョージだろう) I'm sure she will have finished by now. (今ごろ彼女も終わっているに違いない) ただ、この例文では推量が I'm sure のところで表されているようにも取れる。上の単純未来のところでも、I'll have finished this work by five o'clock. が紹介されていて、紛らわしい。この辞典には will の確信度についての説明はない。

6 (pp.2121-2122) でも単純未来との言葉は使われておらず、未来との項目が先ずあり、その直後に囲みのコラムがあり、次の解説がある。「will do は未来に行う、または行われる行為などを表す。ここで言う未来は天気を言うときのような、人の意思ややる気、計画などは関係ない場合である。日本語には未来を表す特定の言い方がないので、決まった訳語にならない。これからのことを話す時に使う (…する、します、…だ、…です) などで訳す (…だろう、…するつもりだ、…する意思がある) などと推測や意思を込めると英文からずれてしまうことが多い」挙げてある例文は、According to the weather forecast, it will rain tomorrow. (天気予報では明日は雨だ) There won't be an exam scheduled on Friday. (予定していた金曜の試験は行われません) We will leave for Paris on 15th. (15日にパリに出発します) 次に、「確実性の高い推量」との項目があり、「やや気取った響きがある」との注意を促している。例文は "Someone's at the door." "That'll be Mary. She said she'd be here around 3:00." (玄関に誰か来てる。きっとメアリーよ。3時頃着くと言ってたわ)

7 (pp.1626-1628) は6版が出て間もない(2012年10月)辞典である。先ず用法として「単なる未来を表す」を挙げ、訳語としては「…でしょう、…だろう、…するでしょう、…となるでしょう」を添えている。例文は人称などで細かに分けて以下が紹介されている。I'll be sixteen this month. (今月で16歳になる) We will be in New York next month. (私たちは来

月ニューヨークにいる) I won't be able to see her again. (二度と彼女には会えまい) We will have to walk to the station if we cannot find a taxi. (もしタクシーが拾えなかったら、駅まで歩かねばならないだろう) Will I be in time for the train? (列車に間に合うだろうか) When will we arrive in London? (ロンドンにはいつ着くでしょうか) You'll be in time if you take a taxi. (タクシーに乗れば間に合います) You won't pass the exam unless if you study harder. (もっとしっかりと勉強しなければ試験に通りませんよ) Will you be at home this evening? (今晚は家にいらっしゃいますか) Will you get there in time if you take this train? (この列車に乗ればそこに時間までに着きますか) She'll be twenty years old next month. (彼女は来月で20歳になる) He won't be surprised at the news. (彼はその知らせを聞いても驚くまい) The conclusion will be announced tomorrow. (結論はあす発表される) Will the weather be good tomorrow? (明日は天気でしょうか) Will our party be a success? (パーティーはうまく行くだろうか?) 他に will be ing の形と will have 過去分詞の形も紹介しているが、これらはそれぞれ be や have のところを参照するようになっており、例文までは挙げてない。この辞典では、初めに訳語として挙げてある言葉と例文の訳の言葉が同じでないものが多く、整合性に欠けるように思われる。次に「推量を表す」項目を見てみると、That'll be the mailman at the door. (玄関にいるのは郵便配達の人だろう) It will be snowing in Boston now. (今ごろボストンでは雪が降っているだろう) He will have reached Tokyo by now. (彼はもう東京に着いているだろう) この辞典は最新のものでありながら、話者の確信の度合いについての言及はない。

8 (pp.2253-2254) では「未来」を表す用法を挙げ、訳語として「…だろう、…でしょう」を添えてある。例文は I will graduate in a few weeks. (二三週間で卒業します) You'll be sorry for it later. (君はあとでそれを後悔するでしょう) He will be severely punished for it. (彼はその事でひどく罰せられるでしょう) What'll be the end of it all? (その結果はどうなるであろうか) Will they be glad to come? (彼らは喜んで来るでしょうか) When will it be ready? (それはいつできるでしょうか) You won't be in time unless you hurry. (急がないと時間に間に合わないでしょう) 次に推量の用法では訳語に「(多分) …だろう、…でしょう」を挙げている。例文は What will that be? (あれは何でしょうか) That'll be our train. (たぶんあれがわたしたちの乗る汽車でしょう) He will be wondering where we are. (彼はわたしたちがどこにいるのかと思っているでしょう) She will have had her dinner now. (彼女はもう食事をしてしまっているだろう) 話し手の確信度についての言及はない。



9 (pp.2039-2040) では、先ず「単なる未来を表す」用法を取り上げ、訳語としては「…でしょう、…だろう、…するでしょう、…するだろう、…となるでしょう」を与えている。この辞典は7と編者と執筆者もほぼ同じである。例文も7と同じく人称等で細かく分けてあり、以下が紹介されている。ほぼ全て7の例文と同じものである。I'll be in New York next month. (私は来月ニューヨークにいるだろう) I won't see her again. (私は二度と彼女には会えない) We will have to walk to the station if we cannot find a taxi. (もしタクシーを拾えなかったなら駅まで歩かねばならないだろう) When will we arrive in Paris? (パリにはいつ着くでしょう) Where will I be able to find my mother? (どこに行けば母に会えるのでしょうか) You'll be in time if you take a taxi. (タクシーに乗れば間に合うでしょう) You won't pass the exam the exam unless you study harder. (もっとしっかり勉強しなければ試験に通りませんよ) Will you get there in time if you take this train? (この列車に乗れば時間までにそこに着きますか) She'll be twenty years old next month. (彼女は来月で20歳になる) He won't be surprised at the news. (彼はその知らせを聞いても驚くまい) The conclusion will be announced tomorrow. (結果はあす発表される) Will the weather be good tomorrow? (明日はよい天気でしょうか)。この他に7と同じく「will be ing」の形と「will have 過去分詞」の形を挙げているが、例文はなく、それぞれ be と have の項を参照するようになっている。

10 (pp.2122-2123) では先ず「単純未来」を挙げているが、「未来の確定的なことや、話し手の考えや予想・期待・推測などを述べる」との説明がある。これは次の11と同じで、他の辞典とは異なる。訳語は「…だろう、…となる(だろう)」となっている。例文は He will get well soon. (彼はすぐよくなるでしょう) I will be 18 next month. (来月私は18歳になります) This time he won't make it. (今回ばかりは彼も成功しないだろう) What on earth will I say? (いったい何を言えばいいのか) We will have good weather. (明日はよい天気になるだろう) I think the yen will go up higher. (私は円高が更に進むと見ています) The expert said the economy would improve later this year. (その専門家は今年後半には景気が回復するだろうと語った) Will you be free this afternoon? (午後はお暇ですか) This time next week I will be traveling in Europe. (来週の今ごろはヨーロッパを旅行中だろう) We will soon be arriving in Chicago. (まもなくシカゴに到着いたします) I won't be visiting this country again. (この国を訪れることはもうないでしょうね) My parents won't be helping me. (おそらく両親の助けは得られないと思う) At this rate I will have saved 10,000 yen by the end of the year. (この調子で行けば、年末までには10万円貯金できるだろう) By the end of this month he will



have lived in this country for five year. (今月の終わりで彼はこの国に5年間住んでいることになる) 次に推量であるが、この辞典では「推測・憶測」との言葉を用いており、「話し手の確信の度合いは should より高く、must とほぼ同じ」との説明がある。訳語としては「きっと…だろう」と「(すでに) きっと「…した(している) だろう」を挙げている。例文は He'll be out now. (きっと今彼は外出中だろう) That woman will be his sister. (あそこにいるのは彼女の妹でしょう) She'll probably be expecting a call from you. (たぶん彼女は今ごろ君の電話を待ってるよ) The letter will have arrived by now. (もう今ごろは手紙が届いているだろう)

11 (pp.1535-1534) は10と編集委員が同じであるが、10に比べて扱う語彙数も半分ほどで大学生や社会人よりも高校生を主な対象としているようである。まず「単純未来」の項目があり10と同じく「未来の確定的なことや話し手の考えや予想・期待・推測を述べる」との説明があり、訳語としては「…だろう、…している(だろう)、すでに…していることになる(だろう)」が大きな枠の中に示してある。例文は、I'll be 18 next month. (来月私は18歳になります) They'll arrive here soon. (彼らはまもなくここに到着します) Will it be fine tomorrow? (明日は晴れるでしょうか) This time he won't make it. (今回ばかりは彼も成功しないだろう) He said she would pass the exam. (彼は彼女は試験に合格するだろうと言った) This time next week I'll be traveling in Europe. (私は来週の今ごろはヨーロッパを旅行している(でしょう) We'll be arriving in Kyoto. (間もなく京都に到着いたします) In one more month they will have lived in this country for five years. (あと一ヶ月たてば彼らはこの国に5年間住んでいることになる) 次は「推測・憶測」との項目では訳語に「(現在)、きっと…だろう」を与えている。例文は He'll be out now. (きっと今彼は外出中だろう)

12 (pp.1743-1744) は分類が次の点で他の辞典とは異なっている。まず平叙文か疑問文で2つに大きく分けてある。次に主語の人称で分けてあり、最後が単純未来や意思未来やその他の用法で分けてある。添えてある訳語だが「…でしょう(か)、…だろう(か)」となっている。例文は平叙文のところでは、I'll be twenty years old next Friday. (今度の金曜日で私ははたちになります) You'll see. (今にわかるよ) I hope he will be able to come. (彼が来れるとよいが) The radio says it will rain tomorrow. (ラジオでは明日は雨になりそうだ) People will have forgotten all about it in a month. (一ヶ月もたてばそんな事世間ではまったく忘れてしまっているだろう) 疑問文のところの例文は、When will we get there? (わたしたちはい

つ向こうに着きますか) Will I see you tomorrow? (明日お目にかかれましょうか) Will you be free next Sunday? (今度の日曜日はおひまですか) What will he say about this? (この事について彼は言うのでしょうか) 次に推量の項目であるが、訳語には「…だろう、…でしょう」を与えている。例文は That man will be Tom's father. (あそこにいるあの人はトムのお父さんでしょう) That'll be the postman. (あれは郵便屋さんでしょう) You will have heard of this. (この事はもうお聞きでしょう) この辞典では上の2つの単純未来と推量とは別に独立して「will be doing」の項目を立て (1)「未来における進行中の事柄、予定、必然性などを表す」と (2)「現在進行中の事柄についての推量」との説明がある。例文は (1) に関しては、Next Year we'll be starting college. (来年大学生活が始まります) When will you be visiting us again? (いつまたおいでになりますか) We will be landing at Narita at approximately 2:30 p.m. (当機は成田空港に午後2時30分に到着予定でございます) (2) に関しての例文は、He will be staying at a hotel nearby. (彼は近くのホテルに泊まっているでしょう)

13 (pp.2165-2167) では先ず「単純未来」の用法を挙げ、訳語としては「…だろう、…でしょう」が与えてある。例文は I will graduate next year. (私は来年卒業します) Hurry up, or you won't be able to catch the train. (急ぎなさい、そうでないと列車に間に合いませんよ) John will be severely punished for it. (ジョンはひどく罰せられるでしょう) Something good will happen. (何か良いことが起きるだろう) It will rain in the afternoon. (午後に雨が降るだろう) You'll regret it for the rest of your life. (一生後悔するぞ) Will you be here tomorrow? (明日ここにいますか) How will I use it? (これをどうやって使ったらいいのだろう) The show will take place in March next year. (ショーは来年3月に行われる予定だ) It is important to learn from your mistakes so that they will not happen again. (二度と起こらないように間違いから学ぶことは重要だ) By this time tomorrow I will be relaxing on the beach. (明日の今頃は海岸でくつろいでいるだろう) Attention shoppers, the store will be closing in five minutes. (お客様にお知らせします。当店はあと5分ほどで閉店します) I'll be staying in Tokyo next week. (私は来週東京に滞在する予定です) When will you be coming back to Japan? (いつ日本に帰って来ることになりそうですか) I will be talking about it until I die. (私は死ぬまでその話をし続けているだろう) The rain will have passed by tomorrow. (明日には雨は通り過ぎていくだろう) By next year I will have been studying English for 10 years. (来年で私は英語を10年間勉強していることになります) 次は「推量・予測」の項目だが「話し手の確信度については must に次いであるいは同じくらい強く、予測が外れる危険性を避け

るために、maybe, perhaps, possibly, probably, surely, I expect, I'm sure, I thinkなどがしばしば添えられる」との注意がある。訳語としては「きっと…だろう」が与えてある。例文は That'll be John's car, I suppose. (きっとジョンの車だろう) She won't be at home now. (彼女はきっと今家にはいないだろう) That'll be 10 dollars, please. (10ドルになります) She'll have left yesterday. (彼女は昨日出発しただろう)

14 (pp.2248-2249) は収録語数が13万8千と他の辞典よりも圧倒的に多い。そのためか will に関する説明や例文も簡潔である。先ずは未来に関する用法であるが、他の多くの辞典にみられるような単純未来や意思未来との用語は用いられていない。単に「未来」となっている。訳語も「(これから先) …になる (と思う)」と独自のものとなっている。例文は1文のみで、She will probably show up an hour late again. (彼女はきっとまた1時間遅刻するよ) となっている。推量に関して、この辞典では「推測」との用語を使っている。例文は1文のみで、He will be at home now. (彼は今家にいるだろう) 話者の確信度については「may より確かな確定」とある。

15 (pp.2019-2020) は6と編集主幹が同じく、また執筆者も重なっており、未来と現実性の高い推量についての例文や訳文や補足説明もすべて同じである。

16 (pp.2007-2008) では先ず、単純未来の用法を取り上げている。下位区分の一番目として「I, You, He, She, It, They」will …の形を挙げ、訳語として赤字で「…だろう、…でしょう」を与えている。例文は、I'll be seventeen next birthday (今度の誕生日で17歳になります) I expect she'll phone this evening. (彼女は今晚電話してくると思う) この後に注として「単純未来の will には I think (wonder, expect) などの表現と共に用いることが多い」とある。他の例文は、John will leave for London on Monday. (ジョンは月曜日にロンドンにたちます) You'll be in time if you hurry. (急げば間に合いますよ) The paint will be dry in an hour. (ペンキは1時間もすれば乾きますよ) Will he recover soon. (彼はすぐによくなるだろうか) Will you be free tomorrow afternoon? (明日の午後はおひまですか) 最初の訳語では赤字で「…だろう、…でしょう」となっているが、例文の日本語訳は1つを除き、全て断定調になっており、整合性に欠ける。二番目の下位項目としては「will be doing (未来進行)」を取り上げており、これも更に2つに分けている。一つ目は「未来の時点で進行している動作・活動」を挙げ、訳語としては「(…の時点では) …しているだろう」を添えている。例文は、

Don't phone me at seven o'clock. I'll be watching my favorite TV program. (7時に電話しないでくれ。好きなテレビ番組を見てるから)二つ目は「事のなりゆき」を挙げ、訳語としては「(未来の時点で) …になっている」を添えている。例文は、I'll be driving into Tokyo next week. Can I give you a lift? (来週車で東京に行くことになってます。ついでに乗せてあげましょうか) Will you be seeing him tomorrow? (明日彼に会うことになっているのですか) この後に「語法ノート」という小欄があり、「will be doing の表す意味」として次の説明がある。「will be doing は (1) 未来のある時点でそうになっているだろうという予測や (2) 現在進行中のことについての現在の推量 (現在進行形の推量) (3) 現在の成り行きからして未来にはそうなるという未来発生の予測を表す」最後の三つ目として「will have done」(未来完了) を取り上げ、訳語としては「…してしまっているだろう」を添えている。例文は、He will have finished the work by Tuesday. (彼は火曜日までには仕事を終わらせているだろう) 次に推量・推定に関して見ておく。先ず冒頭に、「may, might, could などよりは確信のある確定。しばしば must によって言い換え可能」との説明がある。一つ目には「現在の事柄に関して話者が今している推量を表して」「…だろう」との訳語が与えてある。例文は、I fancy (米 guess) this'll be our train. (これが私たちの乗る列車でしょう) This will do. (これでいいでしょう) 二つ目は、「will have done 既に完了した事柄に関する話者の現在の推量 …だったろう」との説明と訳語が与えてあり、例文は She will have been about thirty-five then, I think. (当時彼女は 35 歳くらいだったと思います) となっている。「しばしば must によって言い換えが可能」とありながら、訳語には「…だろう」と「…だったろう」を挙げているのは、整合性に欠けるように思われる。

17 (pp.1887-1888) では、先ず単純未来を挙げて、訳語としては「…だろう、…でしょう」を添えている。例文は、I'll be seventeen next month. (来月 17 歳になります) When will I know the result? (結果はいつわかるのでしょうか) I hope you'll like it. (気に入ってもらえるといいのですが) It won't be much of a rain. (大した降りにもならないでしょう) Will the train arrive on time? (列車は時間どおりに着くでしょうか) 次は未来進行形「will be doing」を取り上げ、訳語としては「…しているだろう」と「…するだろう」を添えている。前者には、未来進行形は状況から判断して「…することになるだろう」という推量に近い意味になるとの説明がある。例文は、I will be having lunch with her this time tomorrow. (明日の今頃は彼女と昼食をとっているでしょう) 後者には「動作の継続ではなく、近い未来を表して」との説明があり、例文として、What time will you be coming? (お帰りは何時でしょうか) がある。次に「推量・推定」に関してだが、この辞典では「推定その他」との用語を使っている。

冒頭に「確実性の高い推定」とある。先ずは「(現在の事柄について) …であろう、…のようだ」と訳語を添えている。例文は、That will be the mailman. (あれは郵便配達の人だろう) As you probably now by now, I've decided to quit the club. (おそらくもうご存知と思いますが、私部活をやめることに決めました) 次は「(条件節の帰結節で) きっと…だろう」との訳語を与えている。例文は、The dog will bark at you if you stare at it. (その犬はじっと見つめるとききと吠えてきますよ) 最後の3番目は「(will have 過去分詞 完了した事柄について) …したことだろう、…して(しまつて) いるだろう」の訳語を与えている。例文は、You will have heard of the accident already. (事故についてはすでにお聞きおよびでしょう)

### 3. 記述内容の検討

#### 3.1. 用法の分類や用語に関して

「単純未来」という言葉が使われているのは、2, 3, 5, 10, 11, 12, 13, 16, 17である。これに近い「単なる未来」との言葉を用いているのは、7と9で、「未来」との言葉を使っているのは4, 6, 14, 15であった。1だけは独特の分類をしている。他の辞典では、「単純未来」や「単なる未来」や「未来」として扱われている項目を「未来に関する推量」とし、それを大きな「推量」の中の下位項目として扱っている。他の辞典での「(単純) 未来」や「単なる未来」として扱われてる用法を、推量の中の1つとして捉えている点が独特である。

もう一つの用法は、「推量」や「推測」や「憶測」や「予測」との言葉を単独で使っていたり、「推量・憶測」や「推量・予測」のように二語を組み合わせであるものもある。ただ、2では可能性という言葉が使われており「可能性・推量」との項目が立ててあり、他の辞典と異なっている。

#### 3.2. 話者の確信度に関して

推量の用法の場合の話者の確信度についての説明では大きな違いがあった。確信度に明確に言及しているものと、それが分かるように訳語に工夫があるのは、2, 4, 6, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 17と全体の約半数余りである。14では「might より確かな確定」と説明が添えてあるが、2や10のようなmustに近い高い確信度とは書いていない。willの推量の用法は頻度が高いのに、確信度について説明していない辞典が半分近くもある。

(単純) 未来についても、大半の辞典で「…でしょう、…だろう」との訳語を与えているだけで、どれくらいの確率で生じる未来の事象とか、また話者がどの程度の確率で起きる事象と考えているかについての説明がない。これでは例えば、It will rain tomorrow. と言われた場

合、どれくらい確率で雨になりそうだと話者が思っているのかは「明日は雨でしょう」や「明日は雨だろう」の訳語からでは分かり得ない。「明日は多分雨でしょう」や「明日は多分雨です」や「明日はきっと雨でしょう」や「明日は雨だ」とすれば、高い確率で雨になるであろうと話者が思っていることは伝わる。また、(単純) 未来のところよく出て来てるのが、I will be 20 next month. のような年齢に関する例だが、これは「来月で二十歳になるでしょう」や「来月で二十歳になるだろう」では明らかにおかしい日本語になるので「来月で二十歳になります」と断定した訳語を与えている。これでは「…だろう、…でしょう」との整合性に欠けているし、一体どのような日本語が相応しいのか、どの程度の確率で生じる未来の事に関して will が使われるのかが分からない。この点に関しては6と15の「日本語には未来を表す特定の形がないので、決まった訳語にならない。(…する、します、…だ、…です) などで訳す。(…だろう、…するつもり、…する意思がある) などと推測や意思を込めると英文からずれてしまうことが多い」との説明は丁寧で分かりやすく適切と思える。10と11もこの点に関しては訳語を与える前に「未来の確定的なことや、予想・期待・推測などを述べる」との説明があり、will の(単純) 未来に関する基本的な理解が得られる。

### 3.3. 訳語に関して

#### 3.3.1. 「だろう」の国語辞典での説明

will の訳語として、(単純) 未来の用法であれ、推量の用法であれ、大半の辞典では「…だろう」やその丁寧ないい方である「…でしょう」を挙げているが、この言葉の説明を国語辞典で確認しておきたい。

『新明解国語辞典』第七版では「そうである(そうなる)ことが十分に推量・想像できることを表す」とある。(p.942)

『明鏡国語辞典』初版では「推量を表す」とし「婉曲な断定の意にも使う」との説明がある。(p.1020)

『大辞泉』第二版では「不確かな断定、あるいは推定の意を表す」とある。(p.2285)

辞典により説明に多少の違いがあるが、確信度や可能性との関連で言えば、「あまり高い確信度や可能性から高い確信度や可能性まで表す」言葉のように取れる。

#### 3.3.2. 推量の should の英和辞典での訳語

次に同じく推量の用法としての should の訳語との比較で考えてみたい。各英和辞典では以下のようになっている。

1では「…のはずだ、…だろう」の訳語を与えている。(p.1520)

2では「たぶん…だ、…のはずだ」(p.1766)や「…したはずだ、…してしまったはずだ」(p.1767)を与えている。

3では「…するはずである、きっと…であろう」や「…したはずである、きっと…してしまっているだろう、…しているはずだが」とあり、「will や must より確信度は弱い」との説明がある。(p.1783)

4では「…するだろう、…するはずだ」や「(恐らく) …しているだろ」とある。(pp.1544-1545)

5では「きっと…だろう、…のはずである」とある。(p.1671)

6では「きっと…だろう、…のはずだ」や「…してしまっているはずである」に加えて「話し手の期待を込めた、かなり確信度の高い未来および現在における予測を表す」との説明がある。(P.1707)

7では「(恐らく) (きっと) …するだろう、…するはずだ」「恐らく…しただろう」とある。(p.1291)

8では「…するはずである、…だろうと思われる (ought) さだめし…だろう (must)」とある。(P.1820)

9は7と全く同じ記述になっている。(p.1627)

10では「…のはずだ、おそらく(きっと) …だろう」や「…しているはずだ、おそらく(きっと) …しただろう」とある。(p.1709)

11は10と全く同じ記述になっている。(p.1217)

12では「(当然) …するはずである、きっと…だろう」や「…してしまったはずである」とある。(p.1381)

13では「…する(である)はずだ、きっと…(する)だろう」や「…したはずだ」となっている。(p.1738)

14では「…のはずである、きっと…だろう」や「…したはずである」となっている。(P.1809)

15は6と同じ記述になっている。(p.1626)

16では「…するはずだ、…であるはずだ」(p.1612)

17では「…するはずである、きっと…であろう」「この意味で should と ought to は will や must より確信度が弱い」との説明がある。(p.1508)

以上 should の訳語を概観してみると、「きっと」や「はず」の言葉が頻繁に使われていることが分かる。



### 3.3.3. 「きっと」や「はず」の国語辞典での説明

『新明解国語辞典』第七版では、「きっと」と「はず」については以下の説明になっている。「物事が見込み（期待）通りに行われると確信を抱く様子」（P.347）「経験的な知識や情報などを根拠にして、当然こうなるにちがいないと判断することを表す」（p.1211）とある。

『明鏡国語辞典』初版では、「きっと」に関しては「自分の推測が実現する可能性が高いことを表す」（p.395）とあり、「はず」に関しては「ある道理や事情などから必然的に結論が導き出される意を表す。またその結論がそれらに基づく根拠ある推定である意を表す。…に違いない」（P.1324）とある。

『大辞泉』第二版では、「きっと」と「はず」は、それぞれ「話し手の決意や確信、また強い要望などを表す。確かに、必ず」（p.892）「当然そうなるべき道理であることを示す。また、その確信を持っていることを示す」（p.2895）となっている。

### 3.3.4. 訳語の比較検討

will の訳語としてよく使われている「だろう」と should の訳語としてよく使われている「きっと」や「はず」を国語辞典の記述から比較すると、「きっと」や「はず」が「だろう」よりも高い確信度や可能性を示していることが分かる。

しかし、いくつかの英和辞典に記載されているように、英語では will の方が should よりも話者の確信度や事象の起きる可能性が高いのである。にもかかわらず、大半の英和辞典では、逆に should の方が高いと思わせる日本語訳を与えている。英語と日本語訳では、逆転現象が起きている。これは、修正されるべきと思われる。

will の（単純）未来の用法の訳語の「…だろう」や「…でしょう」との訳語も、それ自体で適切とはいいたいところがあるが、should の訳語の「きっと」や「はず」との比較で考えると、もっと適切な訳語を与える必要があると思われる。また、そうした適切な訳語に加えて、補足説明として 6 や 15、10 や 11 にみられるようなものを添えるが望ましいと思われる。

## 4. おわりに

これまで見てきたように、will の単純未来や推量の用法に関して、先ずは用語や分類方法にも辞典によって違いがみられた。次に話者の確信度についてだが、触れている辞典は約半数強であった。触れていない辞典にはそれなりの理由があるのかもしれないが、本稿ではそこまでは立ち入らなかった。しかし、約半数の辞典にあるように will の単純未来や推量の用法と分

類されている用法で、その際の話者の確信度が高いということであれば、それが明確に伝わるように、訳語に工夫が欲しいところである。多くの英和辞典で使われている「…だろう、…でしょう」が、あまり高くない確信度から高い程度の確信度を示し得る幅のある言葉であることは国語辞典の説明からも理解できるが、should と must の間に来るほどの確信度を表す日本語として適切とは言いがたい。先にも述べたが「おそらく…に違いない」「きっと…するだろう」のような訳語がより適切と思われる。加えて「確信度としては should と must の間あたり」や「must にかなり近い確信度」との説明もどの辞典にも望まれるところである。

## 分析対象英和辞典

1. 浅野博編（2010）『アルファフェイバリット英和辞典』第2版 東京書籍
2. 浅野博・阿部一・牧野勤編（2011）『アドバンストフェイバリット英和辞典』初版 東京書籍
3. 井上永幸・赤野一郎編（2007）『ウィズダム英和辞典』第3版 三省堂
4. 大塚高信・吉川美夫・河村重治朗（1998）『カレッジクラウン英和辞典』第2版 三省堂
5. 木原研三監修（2010）『グランドセンチュリー英和辞典』第3版 三省堂
6. 小西友七・南出康世（2007）『ジーニアス英和辞典』第4版 大修館書店
7. 瀬戸賢一・遠野由紀夫編（2012）『プログレッシブ英和中辞典』第5版 小学館
8. 竹林滋・小島義郎・赤須薫（2008）『ライトハウス英和辞典』第5版 研究社
9. 竹林滋・小島義郎・東信行他編（2006）『ルミナス英和辞典』第2版 研究社
10. 竹林滋・東信行・諏訪部仁他編（2009）『新英和中辞典』第7版 研究社
11. 田中茂範・武田修一・川出才紀編（2003）『E ケイト英和辞典』初版 ベネッセ
12. 野村恵造他編（2014）『コアレックス英和辞典』第2版 旺文社
13. 花本金悟・野村恵造・林龍次郎編（2012）『オーレックス英和辞典』初版 旺文社
14. 山岸勝栄他編（2008）『アンカーコズミカ英和辞典』初版 学習研究社
15. 山岸勝栄他編（2013）『スーパーアンカー英和辞典』第4版 学習研究社
16. 八木克正他編（2005）『ユースプログレッシブ英和辞典』初版 小学館
17. リーチ ジェフリー・池上嘉彦（Co-chair）（2007）『ロングマン英和辞典』初版  
ピアソン・エジュケーション

## 参考文献

1. 北原保雄編（2002）『明鏡国語辞典』初版 大修館書店
2. 倉持保男他編（2012）『新明快国語辞典』第七版 三省堂
3. ピーターセン・マーク（2011）『日本人が誤解する英語』 光文社
4. 松村明監修（2012）『大辞泉』第二版 下巻 小学館
5. 吉川勝正（2013）「学習参考書と文法書における助動詞 will の単純未来と推量の用法に関する記述についての調査と考察」『KELT』（神戸英語教育学会）28号 3-16頁